農福連携で（農業者と福祉施設）双方にメリット

京都市内の農業生産者と障害福祉施設がマッチング会などを通じて出会い、相互に得意分野を活かして協力する農福連携の成功例が誕生している。NPO法人京都ほっとはあとセンター（京都市）が繋いだ事例を紹介する。

特産「菊芋」のドーナツが人気

菊芋生産者 × 福祉施設

左京区山間部の百井集落の農業者（3人）で組織する「ももい菊芋の会」（山本進代表）は、地域の特産「菊芋」を8㌃栽培し、12月から3月に収穫して粉状化。左京区内の障害福祉施設（ワークセンターHa11e！、あおい苑）に販売している。

この菊芋パウダーで福祉施設が「焼きドーナツ」や「菊芋クッキー」などの〝付加価値の高い焼き菓子〟を商品化し、障がい者の〝働く場の創造〟に繋がっている。

ドーナツやクッキーは、「ももい菊芋の会」が仕入れて、直売所「里の駅大原」や「ももいなつまつり」「左京キラり市」などのイベントで販売するなど、農業者と福祉施設の双方にメリットのある取り組みに発展している。

（上）特産の菊芋を使った「焼きドーナツ」、（下）福祉施設で行う野菜の袋詰め作業（JA京都市提供）

野菜の袋詰めを委託、農場で施設外就労も受け入れ

農業体験農園 × 福祉施設

農業体験農園「東瓦町ファーム」（伏見区）の中井剛さんは、野菜の袋詰めや畑の除草を福祉施設2カ所（ワークパートナーYUI、工房あすく）に委託。多い日には、収穫した野菜（みず菜・菊菜・里芋など）の袋詰め作業を約10人の施設利用者が行い、除草のために2～3人の施設外就労も受け入れている。

農業体験農園「すこやか嵯峨野ファーム」（右京区）の今井義弘さんも、トウガラシ・ニンニクの袋詰めやシール貼り、ハウスイチゴのランナー除去や通路清掃作業を福祉施設2カ所（きらめき、パッソ）に委託。必要な時期に週2回程度、2～3人の施設外就労を受け入れている。

中井さんと今井さんは、「京都農業体験農園・園主会」のメンバーで、3年前から新京野菜「京の黄真珠」（果実が黄色いトウガラシ）を生産し、収穫した果実の選別作業を福祉施設に委託してきた。施設との間で信頼関係が深まる中で、手間のかかる農作業の委託や施設外就労に取り組みが発展してきたという。

福祉施設に農作業を依頼する場合、障がい者が行う業務の内容や作業時間・報酬、作業場の動線や移動方法などについて、施設側との十分な事前調整が必要になる。双方にメリットがある農福連携を実現するためには、農業者側も栽培・出荷する品目ごとに作業方法の改善を重ねるなどの創意工夫や努力が求められる。

現場の想い

地域計画で〝儲かる農業〟の展望を！

◆地域計画の策定に向けた取り組みが各地で進んでいるが、農業者が期待する地域計画の内容を十分検討する必要がある。「法改正で令和7年3月までに地域計画と目標地図を作るので、地域で話し合い、みんなで農地を守ろう」では、一番大切な「何を話し合うか」の説明が足りない。◆農業者が減り、農地が荒れる理由は簡単だ。農業が儲からず、農地が資産価値を失ったからだ。農業者が期待する「地域農業の将来の在り方」とは、儲かる農業者の姿であり、地域計画の意義は「農地がプラスの資産になる姿」を描くことにある。◆儲かる農業の方向について知恵を出すことが何よりも大切であり、先に「誰がどの農地を耕作するか」を議論するのは本末転倒だ。儲かる農業の方向が見えたなら、地域計画は自ずと策定できるはずだ。◆現在やるべきことは、〝儲かる農業の仕組み〟を作ることであり、そのために関係者が努力することに地域計画の意義がある。地域の総力をあげて「儲かる地域計画」を策定してほしい。農業が雇用を創出し、担い手不足や遊休農地の問題を解消して農村の環境保全や国土強靱化につながる未来を期待したい。

（一念通天）

「地域計画で区内外から耕作者の確保を！」

推進委員が広報誌で啓発

京丹後市　明日につなぐ長岡協議会

京丹後市峰山町の多面的機能支払活動組織「明日につなぐ長岡協議会」では、区や農家組合の要望をもとに、獣害防止柵の修繕、用水路の整備など地域の課題を解決する活動を実施。全世帯（342戸）に回覧する「お知らせ」を年4回発行し、農地利用最適化推進委員の嶋田喜一事務局長らが「地域を未来に引き継ぐ活動」を推進している。

1月10日の「お知らせ」では、地域計画の策定や農地中間管理事業を活用した農地貸借について紹介。耕作者の減少により将来的に地主が自ら農地の管理を行わなければならない事態になる前に「機構集積協力金を活用し、地域内外から農地の受け手を幅広く確保を」と訴えて、「区や農家組合と協力して長岡地域の農業環境の保全に努力していきたい」と長岡区民に協力を呼びかけた。

（京丹後市農業委員会）

▲嶋田委員が執筆した「お知らせ」

▲運営委員会で今後の活動を協議（昨年12月17日）

動物と触れあい毎日充実

女性委員が〝つないで発信〟

つないで発信

㈲あっぷるふぁーむ
与謝野町　坂中 亜利菜さん

町内の農業法人（㈲あっぷるふぁーむ）に昨年就職した坂中亜利菜さん（26）。宮津高校卒業後、大阪のドッグスクールで訓練士として働いていたが、「子どものころから興味のあった農業に携わりたい」と昨年退職してUターンした。

会社では春菊・レタス・九条ねぎの出荷、椎茸の収穫、干し大根作りなどを経験。もうすぐ夏野菜の播種も始まるが、「野菜も動物と同じで、手をかけた人の思いに応えてくれる」と感じている。

愛犬ペニーと出勤して休み時間を一緒に過ごしたり、会社にいる馬や牛と散歩を楽しむという坂中さんは、「毎日、動物と触れあってとても充実した日々です」と笑顔で話してくれた。

（与謝野町農業委員会・小田則子委員）

愛犬ペニーと休憩中の坂中さん

乙訓の気候に適した「ぴかまる」を栽培

農deきらきら

向日市
五十棲 正信さん

定年後に実家の農業を継ぎ、現在は約1㌶で水稲とナス・トマトなどの露地野菜を栽培する五十棲正信さん（75）。

水稲では、乙訓の気候に適した品種を探すため試作を重ねて「ぴかまる」にたどり着き、9年前から栽培を続けている。

無農薬で植物性の有機肥料のみを使用し、安心・安全な栽培方法で美味しさにこだわり続けた結果、2021年の「お米番付第8回大会」で優秀賞を受賞した「五十棲さんのぴかまる」は、向日市のふるさと納税の返礼品にも採用され、美味しい向日市産米のPRにも貢献している。

地元の農産物直売所「まちてらすMUKO」でも販売され、消費者に高く評価されている。

（向日市農業委員会）

「ぴかまる」の魅力を語る五十棲さん

京都
京都府支局
京都府農業会議
京都市上京区出水通油小路東入丁子風呂町104-2
府庁西別館内
075・441・3660